
日本科学者会議
京都支部ニュース 10月号 No.344

2012年10月11日発行

〒604-0931 京都市中京区二条通寺町東入榎木町95-3 南館3階

Tel/Fax : 075-256-3132

E-mail : kyoto_kagakusha_3@yahooogroups.jp

URL : <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/jsa-k/>

ゆうちょ銀行振替口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：01050-6-18166

・・・・・・・・ 目 次

- ◆ 科学者集会実行委員会 (9/22) 報告2
 - ◆ JSA 第19回総合学術研究集会(9/14-16)参加報告2
 - ・19 総学に参加して (前田耕治)3
 - ・19 総学に参加して印象に残った言葉 (山口進次)5
 - ・19 総学で池内了氏の講演を聞いて (宗川吉汪)5
 - ◆ 「日本の科学者」読書会 (9/21) 9月例会報告6
 - ◆ 個人会員懇談会フィールドワーク「宇治の都市型水害被災地の現地見学会」(9/25)
参加者の報告・感想8
 - ・「宇治の都市型水害被災地の現地見学会」の報告 (鈴木博之)8
 - ・「宇治の都市型水害被災地の現地見学会」(石川善朗)9
 - ・(清水民子)9
 - ・2012 個人懇フィールドワーク (山口進次)9
 - ・個人懇秋のフィールドワークに参加して (富田道男)10
 - ◆ 講演会・研究会・読書会などの案内11
 - ・『日本の科学者』読書会10月例会 (10/19)11
 - ・個人懇秋の勉強会 (10/25)11
 - ・第18回 詩人尹東柱の想いを今につなぐつどい (11/11)11
 - ◆ 寄稿：21世紀に生きるということ12
 - ◆ 支部幹事会 (10/5) だより13
 - ◆ JSA 近畿14
-

科学者集会実行委員会報告

宗川吉汪

表記委員会が、9月22日（土）15：00～17：00、草津まちづくりセンターで開催。

テーマは、2012年8月1日開催の原水禁世界大会科学者集会 in 大津の総括。

出席者は、滋賀支部から小島、西山、大畑、柳沢、畑、小池、京都支部から宗川の7名。

1. 畑実行委員長から原水禁世界大会参加報告についての報告があった。報告に関して原水協側との連絡がうまくとれなかった。全国事務局に改善方を要求。

2. アンケート結果について、各報告への評価は高かった。特に、女性3人の報告内容への評価が高かった。リレートークも斬新で良かった。市民参加者から、特に討論における科学者の発言に難しい点が多かったとの感想。これについて、「科学者集会」の性格、位置付け、スタイル等と関係し、今後の検討課題とした。

3. 会計報告：9月21日現在、17万9921

円の余剰金。

4. 余剰金の取扱いについて、募金や参加費等を含めた収支報告を実行委員会で承認した。残金については全国事務局には戻さず、担当支部である滋賀支部が管理し、その上で、関連したポスト企画などで今後有効に活用していくことにした。

5. 全国事務局へ以下の申し入れを行うことにした。開催地の早期の決定／原水禁世界大会報告の連絡調整に関し、全国事務局の役割を明確にすること／予稿集の電子版を全国ホームページに掲載すること／準備金が必要なら、予め全国分で予算化すること。

6. ポスト企画（シンポジウム）について宗川より「原発ゼロ JSA 集会」開催の提案があった。開催の検討が確認された。

JSA 第19回総合学術研究集会参加報告

19 総学に参加して

工織大分会 前田耕治

「持続可能な社会への変革をともに」という統一テーマのもと、岡山大学で開かれた19総学に参加した。学生時代、京大宇治分会でJSAへと導いてもらった稲垣さんが実行委員長を務めるということもあり、初めてのフル参加であった。出席した会場は、1日目の全体集会、2日目

の「宇宙、物質、生命、人間と社会の動的構造と発展（第2回複雑系科学シンポジウム）」、3日目の「憲法改正構想の憲法学的・政治学的検討」であった。筆者は、2日目の複雑系科学シンポで発表した。

各会場の様子を報告する。全体集会以

は、池内了氏が基調講演を、安齋育郎氏と室崎益輝氏が特別講演を行った。市民も多数聴講したようで、会場は満席、立ち見が出るほどの盛会であった。

3つの講演いずれも居眠りすることなく面白く聞いた。とくに、池内氏の講演がもっとも示唆に富んでいた。原発の反倫理性は、そもそも事故以前に「過疎への」「原発関連労働者への」そして「子孫への」押しつけ（＝非対称）に存在しているとして、持続可能性に対する挑戦・障害と断じた。科学者の社会的責任については、「科学者は原罪を負っている」とした朝永を評価し、湯川との対比を強調した。クリフエッジ（崖っぷち）の存在や「技術に完全はない」など、科学の限界を市民に伝える努力の必要性が指摘された。科学以外の論理を持ち込まざるをえぬ「トランス・サイエンス問題」という観点からも原発問題の反倫理性が示された。「共有地の悲劇」（私有地なら起らない反倫理的行動）からの視点は興味深かった。持続可能性を支える考え方として、通時性（⇔共時性）、疑わしきは罰する、少数者・弱者・被害者の立場優先（反功利主義）と功利主義（例としてトリアージ）のバランスなどがあげられた。最後に、地下資源文明から地上資源への転換を力説し、いまドイツに困難は、自然エネルギーの割合が20%に達した際の困難で、1%の日本がとやかくいう問題ではないと述べて締めくくった。

安齋氏は、原発問題の理科には関心が高いが、社会には関心が低すぎると、自著の「原発事故の理科・社会」を宣伝しながら、おもに原発が導入され、増殖した歴史について、自身のアカデミックハ

ラスメントの生々しい経験もはさみながら、分かりやすく話された。あらゆる年代や数字をメモに目を落とすことなく淀みなく話し、1時間一気に講演した内容は、まるで講談のようであった。「岩内にいったなんていわない」というおやじギャグに始まり、「鉄人28号は、正義の味方にも悪の手先にもなり、鉄腕アトムより人間らしい」「お上がなんでも解決してくれると思う水戸黄門症候群」など、お隣のご婦人が机をたたいて笑い転げるほど、「わかりやすい」話であった。その分、専門的な話を期待した人には物足りなかったかもしれない。

室崎氏の講演は、冒頭に、自分自身が政府の諮問委員にもなっていて、「反権力」ならぬ「半権力」だという言い訳から始まった。「正しく学んで 正しくリスクを理解して 正しくリスクに備える」という基調で、防災の新しい視点を提示する話であった。防災対策の現実性を表した内容としては、「少数者を切り捨てるリスク」として、1000年に一度の地震で1万人に一人の犠牲を認めなくては防災はできないという言葉が象徴的であった。これは、池内氏のいう「科学者の原罪」や「クリフエッジ」、安齋氏の鉄人28号にも通じる話であった。許容できるリスクと許容できないリスクを科学的に峻別する作業が合理的防災に必要であると理解した。今回の震災でも2万人の犠牲者が出た一方で、40万人の生存者がいることを認識し、なぜ生き延びられたかに防災のヒントがあるとし、パニック時には小学校4年生程度の判断能力になることを考慮して、小4でもわかる防災対策が

必要との話は分りやすかった。確か、釜石の小学生が相互扶助で全員が津波から逃げおおせた経験は、算数の速さの計算ですら津波に例えて防災意識を高めていたという話を思い出した。正しく備えるという点では、3つのレベルに分けることが示された。レベル1：命から文化まで守る、レベル2：せめて命だけは守る、レベル3：災害以前に根源を断つ。最後は、分りやすくいえば、地震後から4分後に津波が押し寄せる串本市の住民はすぐに引っ越せということであった。最後に、「見たくないものは見えない」という示唆で終わった。

2日目の「複雑系科学シンポジウム」では、7件の発表があった。水槽のアプリカツメガエルの体重分布の異常に関する発表、ミツバチのダンス投票による「民主的」行動に関する講演、筆者の液膜化学振動の発表、2つの勢力の対立による臨界状態からの出力分布モデルで地震や紛争を解析した発表、要素の入力が3つ以上でカオス的になるというカウフマンの定式の人生版として提唱された「真の」サイエンスカフェ運動に関する発表、エコロジカル・フットプリントという人間活動の環境負荷の計算モデルの普及を提唱した発表、そして、最後は、前述の臨界モデルを共産党と自民党の選挙獲得票にあてはめ、共産党が変革勢力になりうるかどうかを解析した発表でしめくられた。とくに、最後の学生による発表はなかなか刺激的で、得票の増減をみる限りまだまだ変革勢力とはいえず、

情報エントロピーの増幅（ネットワークの拡大）が必要であるという結論と方法論に賛否が唱えられた。全体的にはほぼ1日を使った、ゆったりとしたスケジュールであり、十分に討論が行えた。「複雑系科学シンポ」としては固定化した形態を取らず、今後も継続的に活動することが確認された。

3日目の午前中に出席した憲法関連の分科会では、4件の講演と約40分の総合討論があった。新自由主義的国家再編、道州制・地方分権、教育基本法改悪と地方教育行政改革が、自民党、民主党、大阪維新の会と姿形を変えて貫かれていることが4つの講演を通じて理解できた。支配層側の「持続可能性」には憲法改正によりナショナルミニマムの最低限の義務だけを負い、あとは地方に押し付け差別化をはかるシナリオがよくみえる。大阪都構想の実現には国会で200本の法案を通す必要があること、特別区の区割りや補助金分配の困難さなど、まだまだ推進側にも幾重のハードルがあるとのことで、戦いはこれからといったところだ。残念ながら、発表者の熱演もあり討論時間が限られた。



閉会集会は出られなかったが、各分科会の総括については他の参加者の報告を待ちたい。最後に、本総学でもっともイン

パクトがあったかもしれない沖縄支部のポスター発表の展示を添えておく。(以上)

19 総学に参加して印象に残った言葉

個人懇 山口進次

池内 了氏 遺伝子組み換え食品の技術は完全ではない。疑わしきは罰するという予防処置原則を適用すべきだ。

必要である。社会企業、ソーシャルビジネスにその道が見いだせないか。

安齋育郎氏 米の対日エネルギー支配の象徴が原子力発電である。国と電力資本は金と権力で強引に原発政策を推し進め、批判する者を徹底的に弾圧した。

生命倫理の今日的課題

宗川吉汪氏 死体を商業展示する「人体展」に医学界や大学、自治体、教育界、マスコミが手を貸し15年間も続けられたのは、我々も含めて人権意識の低さにある。

室崎益輝氏 自然を征服しようとしてはいけない。防災でなく減災を心掛けるべきだ。

21世紀社会像の展開

国村 勝氏 日本の選挙制度は戸別訪問や文章頒布を厳しく規制しているが、このような例は諸外国にはあまり見られない。言論、表現の自由は保障されなければならない。

○分科会

科学・技術の現状批判

山本謙治氏 若年層の不安定雇用、低賃金が蔓延し、生きる望みを絶たれる人も少なくない。人間らしく生きるために

19 総学で池内了氏の講演を聞いて

宗川吉汪

19 総学で、池内氏の基調講演「持続可能な社会への変革をともに」を聞いた。科学者の社会的責任について述べられたが、やや常識的な見解ではないかと感じた。予稿集の講演要旨 (p. 30~32) に則して批判したい。

批判点は二つある。一つは科学者の位置づけであり、もう一つは科学の価値についてである。

はじめに科学者の位置づけについて、池内氏は予稿集で「科学者は傲慢になり-----科学・技術を抜きにして社会は成り立たない」と思い込み、自らが社会の

主人公であるかのように振る舞い、一種の大衆蔑視の意識をもってしまったのだ」と書く。しかし、科学者の多くが今さら傲慢になったのではなく、もともと傲慢になるように養成された者たちである。科学者は階層として現体制の権力の一部を構成する。そのことを認識しないと皮相な科学者論になる。

池内氏は「科学者の役割は何であろうか」と問うて、「社会のリーダーではなく、科学の知識を活かした社会のアドバイザーで」なければならない、と答える。リーダー（権力者）として養成された科学者に社会のアドバイザーが期待できるだろうか。

池内氏は「科学と社会がいかなる関係にあるべきかを常に考える、科学倫理を弁えた科学者の養成が求められている」としているが、そのような科学者を養成する場を社会の何処に求めたらよいのだろう。今の大学には期待できそうにない。池内氏が、科学者会議こそその役割を担うべきだ、と言うのなら、大いに賛意を表明する。実際、科学者会議の会員は、社会の助言者であり、かつ現体制に対する批判者でなければならない。それこそが科学者としての会員の倫理である。

つぎに、科学の価値について、池内氏は

「科学は、コインの裏表と同じく、人間の幸福に役立つ側面と厄災をもたらす側面の両面がある」として、科学の価値中立説に立つ。そして「原発を採用するかどうかは、社会にプラスの側面もマイナスの側面も対等に示され、市民が選択してゆくべき問題であった。それを抜きにして科学者はプラス面だけを強調してきた」と言う。

これはあまりに楽観的な見方ではないか。そもそも、中曽根や正力が原発導入を決意したとき、市民に原発の利害得失を対等に示し、市民に選択する余地を与えるはずがない。安全神話を振りまいて市民をだましてきたのは現体制の一部である原子力ムラの科学者だったのは今や皆が知っている。

科学は科学者の営為の成果である。科学者が今の体制の側にいる限り、科学はその権力の手の中にある。ここですでに科学の価値は中立でなくなる。ブレヒトは戯曲『ガリレイの生涯』（岩淵達治訳、岩波文庫、1979）の中でガリレイに「科学の唯一の目的は、人間の生活条件の辛さを軽くすることにある」と言わしめた。ブレヒトの理想を実現するためには、科学者は国民大衆人民百姓の側にいなければならない

「日本の科学者」読書会 9月例会報告

個人懇 小林芳正

標記例会が9月21日（金）午後3時半より支部事務所で催された。参加者は8名。取り上げられたのは機関誌9月号特集「新しい社会運動の胎動」から以下の4論文である：1. 原 民樹「反原発運

動のエートス」（報告者：山口進次）；2. 島野 照・本田潤一「オキュパイ・ウォールストリートの実像」（報告者：菅原建二）；3. 木原 隆「2012年京都市長選挙とダンス規制反対運動」（報告者：清水

民子) ; 4. 梶原 渉「3.11 以降の原水爆禁止運動」(報告者: 宗川吉汪).

原氏の論文は、エジプトに発したアラブ革命が日本の反原発運動に及ぼした影響を論じた. エジプト革命に象徴的な「タハリール広場」は屋台が並ぶ「村祭りのよう“な雰囲気”で、ゴミを片付けるなど大衆の道徳性、参加者の多様性(女性や異教徒を含む)、指導者不在、IT情報の大きい影響などで従来型の運動と違っていた. 運動は「手段」ではなく、それ自体が目的であるという精神が特徴で、それは日本の3.11後の「高円寺・原発やめるデモ」の「素人の乱」にも引き継がれている. これをアナークイズムの文脈では「予示的政治」(pre-figurative politics)と呼ぶらしい. いつ来るかわからない理想社会を待つのでなく、小さくても今ここに解放された社会を立ち上げることをいう. この戦略から生まれるのが「闘争線をずらす」(指導者がいない、お祭りの運動など)戦術である. 祝祭性を重んじる戦術で権力の弾圧をそらしたりする闘争形態は、確かに従来と異なっているが、闘争の成果が誰か第三者にさらわれてしまうのではないかと危惧が討議で指摘された. ちなみにエートス ETHOS (ギ)とは性格(天性+後天的習性)のことらしい.

次の島野・本田論文は、カナダの1雑誌編集長、カレ・ラースンによる自社サイトでの呼びかけ「ウォール街を占拠せよ OWS (Occupy Wall Street). 7月17日決行. テント持参のこと」に応じて起こったウォール街集会 Rally とその後の運動について、4か月後に現地を訪れ調査した著者らによる報告である. 運動は

すでにだいぶ下火になっていたし、訪問期間は4日間、面談したのは数人の活動家に限られたので、理解は皮相的にとどまったかもしれない. だが著者らによると、ここにも前論文の「タハリール広場」精神の影響が明らかで、金融界の象徴であるウォール街を、99%である貧困層の人々が占拠した(その間だけは支配する=運動が目的を達した)のである. OWSは多くの著名人の支持表明を受け、著者らによる調査当時もまだ既存の労働組合や市民団体との連帯づくりが模索されていたというから今後の発展が期待できるかもしれない. だが、この運動はアメリカ社会の矛盾の告発はしたけれど、現実政治にどの程度影響するだろうか?

第3の木原論文は、今年の京都市長選で敗れた中村和雄候補に対する支持が、ダンスの規制強化に不満を抱いていた風俗営業者らと結びつくことで、選挙戦終盤に急速に高まった事例報告である. 風俗営業者らは、近年、警察によるクラブ等に対する「風営法違反」によるダンス規制が相次いでいることに強い不満を抱き、オンライン署名やツイッターでの議論を展開していた. 日本では、パーティはクラブ等で行われる場合が多く、ここでダンスが禁止されることは風俗営業者には大きな痛手なのである. 彼らと中村氏の出会いは、あるクラブにおけるトークイベントで偶然に実現した. トークで表明された中村氏の規制強化反対の姿勢から、彼らの中村氏支持は選挙戦後半で急速に高まり、中村氏は市長選には敗れたものの、これまでで最高の無党派層の支持を獲得したのである. これは政治化せずに鬱屈している人々の不満がブログ、

ツイッター、フェイスブックなどで急速に運動化された一例である。

最後の梶原論文は、原水爆禁止運動が新たな高揚を見せているのは、3.11の与えた衝撃と、世界的には「アラブの春」や「ウォールストリート占拠」などにより、運動が新たな形態を獲得しつつあることによるという。まず原水禁運動の歴史を振り返り、到達点を総括した。その成果は国連総会でのこの運動の評価、NPT（核不拡散条約）支持の広がり、「核兵器のない世界の平和と安全」に対する189か国の合意等からも明らかだが、では核廃絶が現実化出来るかとなると、識者・メディアとも悲観的である。ところが、このような閉塞的状况に3.11原発事故が新たなインパクトを与えた。その影響は1)被爆の実相への関心の高まり、2)平和大行進のスタイル変化（アラブ革命のようなサウンド入りなど）とそれへの支持の高まり（飛び入り参加、自治体の協力）に表れている。このような新局面

に当たり、今後の原水禁運動の課題として著者は、1) 運動の若い担い手の育成、2) 核廃絶に日本がイニシアティブをとること、3) 核廃絶と反グローバリズムの結合、4) 核兵器廃絶と脱原発の結合を提起している。

以上4論文の著者はいずれも20～30代の青年で、どれも最近の目覚ましい出来事がIT情報の強い影響下で起こったことを示している。若くない本報告者は、はっきり言ってよくわからないなという印象もぬぐえず、本稿をまとめるのにも苦勞した。だが、この頃の若者には、新聞などよりもネット情報の影響の方が大きいだろうということは理解できるし、振り返ってみると、かくいう報告者も最近ではわからない情報をネットから得たことも少なくない。とすれば、今後の運動形態は、従来型のスタイルに固執せず、ネットをもっと活用したほうがいいのではないかと思当る。そんな教訓が得られた読書会だった。

個人会員懇談会フィールドワーク「宇治の都市型水害被災地の現地見学会」参加者の報告・感想

<個人懇談会フィールドワーク (9/25) >

「宇治の都市型水害被災地の現地見学会」の報告

鈴木博之

さる8月13～14日に宇治市周辺に最大時間雨量78mm、最大10分間雨量20mm、総雨量311mmという記録的豪雨があった。この集中豪雨により、宇治市の木幡、菟道、志津川および炭山地域は大きな被害を受けた。その中で案内者の紺谷さんの地元である菟道地区の戦川（たたかいがわ）流域の被災地を、案内者を含めて7

名の参加で歩いて見学した。天気もよくて快適な現地見学会であった。

戦川流域の水害被害は、この地域の低湿地ではなくて、山地の麓の丘陵地に位置する住宅地が河川の氾濫による被害を受けたという点が特徴的である。多くの橋に流木が詰まって流れをせき止めたために、氾濫した水が住宅を襲い、倒壊し

た家屋は少ないものの、広い地域に床上・床下浸水を引き起こし、多量の土砂を堆積させたようである。

山地のゴルフ場や丘陵部などの開発で、伐木が放置されていて、それが流木となったようである。また、山地に近い丘陵の団地開発が進み、大量の雨水が地下浸透せずに水路に流れ出すこととなり、団地周辺の水路は立派であるが、下流の旧住宅地の水路が排水能力不足の状態となっていたこと。さらに宇治市の河川課が

廃止され、府の土木事務所も統合で旧宇治土木事務所が廃止となり、災害対応に遅れが出たことなどが、災害拡大の要因とされていて、人災的側面が大きいと感じた。

被災後1ヶ月以上が経過していたために復旧が進んでいて、地元に住み当日の状況を熟知した紺谷さんの案内がなければ、当日の被災状況を復元することはほとんど不可能であった。案内の紺谷さんに深く感謝したい。

「宇治の都市型水害被災地の現地見学会」

石川善朗

木幡池の水が道路に溢れているのを見ていましたので、この企画に参加しました。道路が水路となって数10cmの高さで流れたという話は、にわかには信じられませんでしたが、塀などにその痕跡を見せられますと、そうなのかとビックリです。

水路が正常に働いていればこれほどの被害は出なかったのでしょうか、流木が橋で止められそれが水の流れを止め、溢れて道路に流れ出したということも聞きました。土砂崩れが起きて木が流れ出す

ということであれば理解できますが、間伐で伐りっぱなしにしてあった木が流れ出すというのはどういうことでしょうか。沢に転がっていたのでしょうか。流木の問題は被害を大きくするので考えさせられます。

天気も良く気持ちよく歩くことも出来ました。お世話いただいた皆さんにお礼申し上げます。

清水民子

ボランティアの尽力で、災害の痕をほとんどとどめない外見でしたが、被災された方々の生活の内側には長く続く傷跡と不安をかかえておられることでしょう。

「見て歩く」という行為に申しわけなきを感じながら、彼岸花にも出会えた今年の秋と夏を忘れません。

2012 個人懇フィールドワーク

個人懇 山口進次

京阪三室戸駅に降り立つと、澄んだ秋空に緑の山並みが美しく連なっている。駅から山手に向かうと、なだらかな上り

の丘陵地帯。三室戸寺の脇を流れる只川も、今は僅かなせせらぎを残しているのみ。40日前この地に起きた集中豪雨は、

この川を溢れさせ道路が濁流となって流域の住宅に大きな被害をもたらした。

源流の山の上には保水能力の少ないゴルフ場や、送電線の下刈りされた地域が

あるという。また竹林を大規模に開発した住宅団地が広がっていた。異常気象による局地的な豪雨と、自然を壊してきたツケが回ってきたのかも知れない

個人懇秋のフィールドワークに参加して

富田道男

フィールドワークは、8月14日未明の集中豪雨の被災地のひとつ三室戸寺周辺地域の見学でした。

参加者7名は、京阪電鉄の三室戸駅前に9時半に集合して、被災地の極近くにお住いの会員紺谷さんの案内で、まず山側の洪水の発生地に向かって出発し、そこから下りながら被災地域を見学する行程をとりました。紺谷さんが用意された2万5千分の1の三室戸寺周辺の地図を片手に、地図上の×印の付いた見学箇所を順次訪ね歩きました。ここは、只川の2本の源流や菟道大谷川が川幅を広げることなく新興住宅地内を蛇行していて、流木にせき止められて溢れた土砂流が狭い道路を川にして流れ下ったそうです。被災直後から多数のボランティアの人たちの手で復旧作業が進められたそうで、ほぼ40日経過した当日は、住宅地域の橋の欄干や崩れた石組みの土手など被災現場の殆どは、人が住めなくなった家屋を除いて、修復されているようでした。しかし、住宅地域へ下る途中の上流側の山合いには、崩れ落ちた山の斜面と倒木が放置されている箇所がいくつもあり、豪雨のすさまじさを感じさせるものでした。

この地域を流れ下った洪水は、立命館

宇治中学菟道グラウンドのブロック塀で遮られ、周辺民家を水浸しにしたので、消防署が塀を破壊して水をグラウンドに逃がしたところ、濁流がグラウンド前の府道を超えて、JR宇治線に流れ込み線路の砂利を一部流したそうで、見たときには真新しい砂利で補填されていました。

今回のフィールドワークで学んだことを整理すると、同じ地域に隣接する山の斜面に造成された明星団地や羽戸山団地は、まったく豪雨被害を受けていない様子なのに対して、三室戸寺西側の住宅地は大きな被害を蒙っている。その原因が流木による川のせき止めであり、間伐材や伐採木を処理せずに放置していたことによる人災であること。これは結局、行政による山の乱開発の放置と河川整備をしない無警戒宅地造成の認可にあるということです。

最後に、好天にも恵まれ、案内役をして下さった紺谷さんのご尽力により大層有意義な学習ができました。ここに記して感謝とお礼を申し上げます。

講演会・研究会・読書会などの案内

『日本の科学者』読書会 10月例会

日 時：10月19日（金）15:30～17:30

場 所：JSA 京都支部事務所

『日本の科学者』10月号特集「科学と教育の結びつきを問い直す」

田中論文：OECDの教育政策提言における evidence-based 志向の問題性
（報告者：清水民子）

米山論文：福沢諭吉の実学思想（報告者：藤井一）

三石論文：「原子力・エネルギー教育」の教材研究（報告者：宗川吉汪）

澤田論文：科学教育のカリキュラム・ポリシークス（報告者：鈴木博之）

個人懇秋の勉強会

日 時：10月25日（木）午後1～5時（予定）

場 所：東山いきいき市民活動センター（予定）

テーマ：橋下・「維新」の会を考える

1. 鱈坂 眞氏：橋下・「維新」の会の本質をどう見るか
2. 望田幸男氏：「ハシズム」とナチズムの間に立って－3つの視点から－
（討論の時間を十分にとって議論をしたいと思います）

第18回 詩人尹東柱の想いを今につなぐつどい

<第1部ミニライブ>

ピアノ弾き語り ケイ・シュガー

<第2部>

基調講演 「尹東柱のまなざしー過去・現在・未来」

尹健次（神奈川大学教授）

報 告 「開示された尹東柱（ユンドンジュ）と宋夢奎（ソンモンギョ）の判決文」

水野直樹（京都大学人文科学研究科教授）

「尹東柱の詩の世界」

小倉紀蔵（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

<第3部>パネルディスカッション「詩人尹東柱 記憶と和解の碑」建立を願って

司 会 仲尾宏（京都造形芸術大学客員教授）

発 言 尹健次（神奈川大学教授）

日 時 : 11 月 11 (日) 13:30 ~ (開演 13:00)

場 所 : 宇治市生涯学習センター 1 階ホール

(JR 宇治駅前 のバス道路を右、宇治市役所方向へ徒歩 10 分、宇治市庁舎より山側ドーム屋根の建物)

主 催 : 詩人尹東柱記念碑建立委員会 詩人尹東柱を偲ぶ京都の会

参加費 : 一般 1000 円, 中・高・大学生・身障者 700 円

連絡先 : 0774-24-7094 (紺谷)

寄稿 : 21 世紀に生きるということ

富田道男

高度情報化社会形成基本法 (IT 基本法) が 2000 年にできて、21 世紀の日本は、ICT が従来からの「読み・書き・算盤」にとって代わることになった。我が国のあらゆる分野で情報化が進み、IT 基本法ができてから 10 年後の今日では日常生活に溢れる情報を上手に使いこなす能力、すなわち情報リテラシーが欠かせないものとなっている。

教育の分野でも「教育の情報化」が進められ、情報リテラシーの育成が初等教育においてカリキュラムに取り入れられている。現代生活の時間と空間は、その様相を大きく変えて、多機能を備えた携帯情報端末の中には、外国の知人と顔を見ながら会話ができるものも普及している。この技術は確実に地球を小さくしてしまった。

IT 基本法成立の頃、「IT Devide」ということが懸念材料として指摘された。Devide とは分水嶺の意であり、IT リテラシーの有無が人々の社会生活を二分するのではないかということである。数年前に大学を定年退職したさる高名の学者が、ワープロやパソコンが苦手な、原稿などは研究室の若手にパソコンで作成さ

せたことを自慢げに話しているのを聞いたことがある。これなどは極端な例であろうが、当代の読み・書き・算盤ができないことを自慢しているのであり、表現・伝達の手段を 20 世紀に置いてきたともいえる前世紀的遺物に他ならないというべきであろう。ICT は技術の一つであり、社会生活に必要なものは身に着ける努力をしなければ社会人にはなれないのではないだろうか。

東日本大震災の際、多くの個人の撮影した津波の映像が YUOU TUBE に投稿され、あっという間に世界中に伝えられたことは記憶に新しい。デジタルビデオカメラを用いて、身の周りの情報を世界に発信する人たちが日本には多いことを世界に示した事例である。

日本科学者会議の Web サイトから全国の支部が開設する Web サイトを見ることが出来る。全国 47 支部のうち Web ページを開設しているのは、わずか 16 支部であり全体の三分の一である。このことに三つの理由が考えられる。一つは、分会を基礎に活動する会則に従った結果、教員の多忙化等による分会活動の低迷が活動を宣伝する有力手段である Web サイトの開

設を必要としないこと、二つ目は、支部や分会の活動が大学施設を無料で使用できたために支部活動の費用を会員から徴収する必要がなかったが故に、Web サイトを開設するサービスプロバイダーとの契約費用がないこと。三つ目は、科学者会議の支部構成員の多くが、Web サイトを開設する技能を習得できないでいること、

である。

京都支部の Web サイトに最近「高齢者向け実践的 Web ファイルの作り方テキスト」が掲載された。停年退職したからといって、科学者に停年が来るはずもない。一念発起してご自分の Web サイトの開設に挑戦してみたいかでしょう。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ 支部幹事会だより ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

第 5 回幹事会（9 月 21 日）、第 5 回事務局会議（10 月 5 日）の報告です。

1. 新入会員および会員の異動

一般会員1名、院生会員3名、学生会員1名の入会が承認された。

また、一般会員1名が復帰した。これにより、会員数 282（一般 251、学生・院生31）、読者 7（うち1は贈呈）となった。

2. 会費納入状況

2012年度会費納入率は9月30日時点で58.8%。引き続き会員みなさまのご協力をお願いします。

3. 支部分会の設置について

これまで以下の分会の設置が承認された

- ・京大医学分会：分会員5名（代表者：菅原）
- ・工繊大分会：分会員6名（代表者：前田）
- ・学生研究会：分会員3名（代表者：上野恭平）
- ・個人懇談会：分会員7名+α（代表者：鈴木）
- ・関西技術者研究者懇談会京部分会：会員4名（代表者：山口進次）
- ・京大宇治分会：会員6名（代表者：堀口）
- ・社会体制研究会：会員3名（代表者：田中雄三）
- ・脱原発研究会：会員6名（代表者：宗川）

4. 会員5000人回復運動について

19総学に出席した院生・学生会員に働きかけた結果、新たに4名の会員が入会

5. 秋からの活動について

- ・個人懇の秋の勉強会：10月25日
- ・科学・技術フォーラム（工繊大分会）11月24日
- ・科学・技術フォーラム（新入会員の講演会）12月に開催予定
- ・原発ゼロ JSA 集会（近畿地区）来年2月～5月に開催予定

（文責 宗川吉汪）